

# 子供の想像生活

東京女子高等師範學校  
附屬幼稚園保母 小 高 つ や

昔話にこんな事がある。

或町端れの家一人の盲目の女の兒があつた家の後に廣い荒地がある。以前は人も住んだらしく破れた垣根や朽ちた板がまだ残つてゐるが今は苦むして見るかげもなく庭には鋸屑のこぎりくづや木屑がつみかさなつてゐる。溝には泥水がつまつてゐる。鼻をつく様な臭がどこからかして來ると云ふ有様で誠にひどい所であつたけれどもこの盲の女の兒は此處をこの上もない美しい所として朝夕このあたりを逍遙しやうようし手探りに物に觸れては一々驚嘆の聲を發して「これは仙女の作つた宮殿である」と思つて居つた。或る日この國の王様が假の姿で來られたが、この盲女の話を聞いてその美しい空想

の世界とこのみるかげもない現實の姿とをくらべて如何にも不憫ふびんであると思召して盲女のゑがいて居る想像の通りに宮殿をこしらへて早速その中に住ませた。所が思ひきやその女の兒は新しい住居すまかの冷たさと手觸りてぶかのわるさに驚いて王様のとめるのも聞かずにまたもとに驚いた荒地にかへつて喜んで平和な幸福な日を送つた。と

實に想像の力はあらゆる現實を超越し最も卑近な最も貧しいものの中から驚嘆すべき愛好すべき一つの世界を作り出すのである。自分が子供に接する時にいつも強く感ずる事は彼等の想像作用の驚くべきものであると云ふ事である。よく子供を詩人にたとへるもこゝにあるので彼等の生活その

ものが一つの詩をなして居る事が多い、「飯事遊び」や「兵隊ごっこ」や「砂あそび」その他大抵子供の遊び―否彼等の遊びは眞剣な仕事であり彼等の生活全體であるのであるが―は強き想像作用の發現にはかならない。かの子供等がしばしば耽りやすい晝夢の状態も亦想像作用の著しくなつた時である。

子供の想像は謂ゆる所働的奔逸的であつて一定の目的に向つて進むと云ふ性質にとほしく且如何にも活發な創作的な所がある。

春の暖かな日に縁側に足を投げ出して何やらわけのわからない歌をうたひながら、うつとりと晝夢に耽つて居る稚兒を見る時に誰が、「お行儀がわるい事！ ちやんとお坐りなさい！」と無下に此の想像に酔ふ子供の美しい夢をさまたげるであらうか。「先生！ 僕の手の中に蝶々があますよ！」と兩方のかはいらしい手をつばめながら花園の側に立つ人にかけて來る「どれれ拜見！」子供は

手をひろげて何にもない空間を指しながら「ホーラ！ ね、とんで出た!!」と云ふ時にどうして「マアうそばつかり」と叫ぶ事が出來やうか、花にたはむる、胡蝶とともに舞ふ子供等、手の中に蝶がはいつたと思ひまた彼等の豊かな想像力は皆無の空間に美しい胡蝶をゑがき出すのも無理ならぬ事であらう。

子供ほど時間空間を超越して自由な發表をするものはあるまい、彼等は各々の想像にまかせて次から次へと移りゆき少しも顧る所がない、毎日幾人かの子供と遊ぶその遊びの寫生の中から特に想像に關係すると思ふものを最近（大正五年九月から大正六年二月頃迄）の受持つた子供（年齢は七歳乃至八歳―但し數へ年）について時日及事柄の順序なしに羅列して見る事も將來心理學上又教育上何かの資料にならうかとも思ふ。

エマーソンの言に「若し星なるものが一瞬間僅かに一回のみ出現するものであるとすれば人は如

何ばかり驚嘆し崇拜し萬代に語り傳へて此の神の都を記憶するであらう」と、自分は子供と毎日遊んでゐる時にこの小詩人達の一言一行が實に一瞬にして消え、しかも再び得る事の出来ない貴いものであるのは一方、我々の記憶には限りがありその上子供一人一人の生命をあづかつて居るほどの重い責任をもつた忙しい身であつてそのため彼等子供の貴い眞實の生活を永久に忘れ永久に逸しつゝ、日々を送ると云ふ事が残念でたまらない。人間の動作の刻々ときの變化を寫し取る事の出来る活動寫眞の發明された今日もしも子供の全生活にあらはるる言行を寫しとる器械が出来たならば力ある保育をなすために如何によき資料を得られる事であらうと常に思ふのである。

以下に抄録するは自分が短かい間に遊んだ子供の言行のごく一部分に過ぎずしかも印象にのこつたものゝ中の特に想像作用の著しくあらはれたもののみをあげるにとりめたのである。

#### 註

子供の姓の頭字をとつて子供をあらはす事とし男兒はABC等大文字を以て―女兒はabc：：等小文字を以てする事とした、且前にも云つた様に事柄の順序：即ち各々の例の聯絡とか日附の前後などを一々都合よく配列する暇が見出されなかつたので全く無順序に羅列したに過ぎぬ。

且兒童の家庭：：兒童生活の全體をいつもその家庭が背景になつて居るのであつて家庭をぬきにした子供は考へられない：：社會的地位は中流或は以下のものが多いと云はねばならない。けれども子供の純なる心は貧富貴賤を超越ていやくして居つて絶對なおかす事の出来ない貴きあるものをもつてゐると思ふ、境遇が人を支配し性格を形づくる事は勿論あらそはれない事實であるが、子供にはまた境遇がおかし得ぬある貴き純潔さをもつてゐる事も忘れてはなるまいと思ふ。

(1) 豆で製作をしてゐた時豆の皮に少し皺が入つてかたくなつて居た時に S 兒曰く「先生！ヒゴ(豆)の製作に用ふる竹(たけ)に豆が通りません。豆が、お爺さんになつて皺(しわ)がよつたんです。」と

(2) 雨の後水滴が枯木にあるのを見て「ヤー梅の蕾の様だ」と七歳の男兒云ふ。

(3) 四歳の男兒澄み渡れる空に白雲のかゝれるを見て曰く「先生！氷の様です」保姆「ア、本當にきれいな雲(くも)ですね」その兒曰く「雪(ゆき)の様ですねえ」

(4) 枯枝の水滴に對し M 兒(七歳)曰く「先生！先生！まるで螢の様ですねえ」

(5) ストープの唱歌をうたつた日であつた其歌詞は「廊下は寒い風が吹くお庭は雪が降つてますそれにお室は暖かいどうしてそんなに暖かいそれはお室のストープがトロ(とろ)くもえてゐますから」丁度室にはストープを焚いてあつた、「どんなにもえてゐますか」と聞いて見たら小供は實物を觀察して曰く「先生！ボウ(ぼう)くもえてゐますよ」と、大

人の頭から考へ出した形容の言葉よりも小供自身の見るが儘の發表が小供に適當である事を思つた

(6) 室外に縁臺を高く積み上げて熱心に遊んで居つた初めは「ま(ま)ごと(ごと)の様であつたがその中にここが陣(りょうほう)になつて兩方に別れて戦争を初めた、其騒

の一しきり濟んだ時に主婦役の T 兒が「ま(ま)ごと(ごと)の道具を出してこれから皆に御飯(ごはん)をあたへ様としたその時大將株の S 兒曰く「今戦争したばかりだから塵埃(ぼろぼろ)がたつて居るからいけないよ」と、また曰く「よく水をかけないとコレラの黴菌(びいきん)があるよ」と(丁度半年も前にコレラ流行の騒ぎがあつた自由自在な小供の想像力は時と所を超越して社會事故を好きな時に自分達の遊び(あそび)の中に取り込んで居る。また同じ S 兒この時非常に騒いたので顔があかくなつて居つたが曰く「今風呂にはいつて来て赤くなつたのだ」と誰も聞かぬのに自答しながらはちきれ層な肥えた林檎色の頬をさすつて居つた、戦争からコレラから風呂への變化は實(じつ)に自由

なもの。

(7) 大勢の小供が砂場で餘念なく遊んで居る、その中に七歳の男兒五六人「土俵をつくらう」と云ふ議が決して皆が杓子(砂場用)を半ばうづめて土俵の周圍を作るのに一生懸命である其の中のS兒しきりに杓子を探して居つたがふと長方形の古い積木が砂場に落ちて居るのを見つけたいきなりこれを兩手で持つた何か土俵の方に用ふるかと思つて見てゐると思ひきやそのまゝ兩手にもち砂の上を丁度大人が雑布(ざつぷ)がけでもする様な素振りをして走りながら曰く鯉節削りだ!と、土俵と鯉節と、何の聯絡が其處にあるのだらうか。

(8) S兒とK兒しきりに砂場に穴を掘つて「落とし穴落し穴」と云つて喜んで居つたが其の中にS兒曰く「石童丸の帽子の様だ」と、今堀つたばかりの穴を眺めながら。

(9) 十二月の末砂場は風は寒いが日當りのよい一日であつた。服かい日光を脊中にうけて臺の上に

砂をならすのに餘念のなかつたK兒曰く「よいお天道様だ」と同じ遊びにふけつてゐた隣のS兒「天照大御神様だね」と、尙熱心に砂をならしてゐる、これを見てゐると云ふに云はれぬ感にうたれた。

(10) 朝子供等にダリア芋を見せた時子供は芋そのものには一向に興味を起さないその形が既に彼等の想像の材料になつてしまつて之を見て「兎の様です、卵みたいですよ」アレ／＼あそこに穴があいてゐる」などと思ひ／＼の發表をして一しきり室内は賑かになつた。

(11) 動物園に行つた日奇問百出の中に駝鳥の口を見て一兒曰く「あの口はお煎餅みたいですよ」とまた大樹の根が大變にはびこつてゐるのを見て「先生象の足みたいですね」と云ふ。

(12) 黒板畫に桃太郎の繪がかゝれた桃太郎が陣羽織を着てゐる、それを見て七歳の一男兒「ヤアー、ちやん／＼こ(赤兒の着る袖なし)の意)を着て居る」と云へば六歳の一男兒「陣羽織」と訂正する

と先の兒曰く「ア、大石藏之助も着てゐた」と云つたその後で室に入る時に太い藤の蔓を結んで手にもつて居つたが曰く「先生！これは大石藏之助の陣羽織の金の羽織紐ですよ」と、

13 子供等が「兵隊ごっこ」をするのを見ると必ず帽子をかぶる時には大將になる兒をわざ／＼砂場用のくすぶつた箆をかぶつて威張る、何か頭へのせなければ軍人の氣分が出ないのかもしれない。

14 校内を一週して室に歸つて來た時七歳の男兒の一人曰く「先程黴菌の靴があつたの、寄宿舎の所に泥が一ぱい附いて、それをMさんが振り廻したの」と、黴菌の靴と云ふ發表が面白い。

15 色の紙で家をたゝんだ時M兒が「先生！ねえ！此家は山の中の一軒家なんですねだから淋しいのですよそれでね神様が「天の川の所へつれて行ってやらう」つて云つてね地面がズーウともちあがつて行くんですよ」と云ひながら今折つた紙の

家を下から上にもち上げて行く。たつた三寸四方の紙でたゝんだ平面の家にどうしてこれ程の想像が加へられるのか、私は詩そのまゝのこの言葉を學理的に解剖などしたくない、これは十二月十四日の出來事で天の川の話を目にする頃でもないであつた。

16 M兒が晝食後しきりに寫生を初めた何處からか竹の棒を探して來て之を畫架にするつもりか一人で大苦心をしてゐるやがてその上に石板をたてかけ危いながら形式がとゝのふと大喜び「これから寫生を致します」と大得意の顔、書きかけると忽ち竹の棒がたはれてしまつた、また一生懸命になはして居る實に呑氣に勝手に頭に起つた一つの觀念をすぐに實際にあらはして想像のはたらくまゝに進んで行き一度其の支配のもとにおもむけば實にせまい混雜した保育室も廣々とした野原と化せられ寫生の氣分になるのであらう、それにしても寫生と云ふ事を思ひつのはさすがに大正の子

供であると思ふ。

(17) 天神様に遊びに行つた日の事鳩が一齊に飛び出して圓を書いて揃つて飛んでゐるのを見て「ア、先生！鳩が運動會をして居ます、誰が一番でせうねえ？」と、自分達の生活にすぐに結び付ける所が面白いと思ふ。

(18) S 兒室内に用ふる蓆こゝろを細く巻き之を抱かへて居つたが重さうに肩に擔かついだそして曰く「加藤清正の虎退治!!」と大聲を出して足取り重々しくおどる様!!其の眞劍の様子が可愛らしかつた。

(19) 「まゝ、ごと遊び」は想像的分子が非常に多い二三の例をあげて代表して見やう。

(イ) 臺所道具が持ち出された、六歳、七歳の男兒女兒數人が蓆こゝろを敷いてそこに座し一家庭が作られた、玩具の中にある道具をそれ／＼に主人役主婦役のものが手分けして持ち彼等の見聞する實生活を再現しはじめた主人となつた熱血兒 A 「盛に家族に命令を下して居る、誰は味噌をすれ! 誰は

おへつ、ついに火をもやせ!」と彼等の家庭では主人が臺所まで出張するのであらう、家庭生活そのまゝを各々が演じて居る時に、N 兒が摺りこぎを逆さかさに持つて居ると M 兒「それぢや逆だよ君!」と注意するやがて味噌をする眞似が初まつた生憎その玩具の中に味噌漉がなかつた、「先生!味噌漉がないので今朝はお味噌汁が出来ません!」と訴へて來たのは女兒ではなくて A 兒であつた、やがて自分は二三人の子供の手をひいてお客様になつて行つた、席につくと A 兒が一方に膳を一方に飯櫃びんを捉つかんで出て來るその可笑しさしかかゝる遊びの間に自ら禮儀が教へられるのでよい機會であると思ふ其の中二三の子供の間に争が起るそれは一つの土瓶を「お客様に出そう」と云ふ子供と、よい方の土瓶だから奥にしまつて置かう」と云ふ子供との間の争であつた、彼等は彼等の家庭生活を生き寫しにする、「まゝ、ごと遊び」は強き想像力の満足にとゞまらず實生活の模寫と云ふ上から價値

ある遊びである、たい之を指導する上には種々の方面に心の準備を要すると思ふ。

(ロ)積木で家を造つて「まゝごと」遊びの時W兒私の家の姉さんは二人ともお嫁よめに行きましたからお遊びにお出で下さいね」O兒紙の人形を持ちて「遊びに参りました」W「よくいらつしやいました昨晚はまぬりまして、久しい間、お邪魔を致しました」O「いゝえ、お茶も差上、ませんで失禮致しました」W「新しいお庭を造つてお舟を買ひましたから皆様どうぞお乗り下さい」O兒これには何にも答へないでO「左様なら！又乗りますどうぞ遊びにお出で下さい」W兒、今迄のお座敷を壊しながら「私の家は地震がゆれてこはれてしまひましたから今度には西洋料理屋をします、ハイカラな奇麗な家を造りますからお出で下さい」と云ふ。

(ハ)同じ時にm兒とw兒との對話m兒紙の人形を持ちて「赤ちゃんをお目かけに参りました」w

「よへららしました、どうぞ此方へお上り下さ

い」m「いゝえ此處で澤山でございます」…しばらくm兒は人形をもつて立つて居たが一向にw兒が何にも云はないので m「マアそんな事云はないで一寸お上りなさい」つて云ふものよ」とお客に催促されて主人役のwがその通りに云ふと O兒が「どうも有難う存じます」とて積木の座敷に人形をすはらせる、すべてが眞面目にやつて居る、此位の年から「上りたいけれども一度はことばるものだと云ふ事が教へられるかと思ふと、大人の世界から彼等單純な質朴な小兒等を全くはなしたくなる。

(20)戦争ゴツコの盛に初まつた時に木製の鋤がサーベルになつたり鐵砲になつたり自由自在である大將の號令に従つて子供は動いてゐる寒中でも汗を出して夢中で遊んで居る、其の中W兒O兒の二人の女兒が「赤十字よ」と云ひ砂場から砂をもつて來て紙につゝみ「お薬がないから砂で作りませう」と云つて居る又曰く「泣いたりなんかして可



愛相な人にはお花をもつて行つてあげませう」と、何と云ふあたゝかな柔しい情の發露であらう、しかも「赤十字」と云ふ任を自ら選んだ彼等の役目は泣いた子供をなだめる事である其同情の心は決して彈丸雨霰の戰場に手や足を失つた戦士をいたはる看護卒とかはりはないのであらう。

子供の自由な想像力を満足させる上から云つても常に考へさせられる事は彼等の玩具である、子供が或る實生活の眞似事をして彼等が早く其の氣分になる爲めには玩具は可成的實生活に用ふるものに近いもの——形の縮少されたもの精巧の度の小なるもの——が善いわけである、けれども他方から考へれば既に完成して居る玩具では如何に主觀的に物を取扱ふ事の得意な彼等と雖も束縛される所がある、子供が玩具に厭きると云ふ事に種々原因があらうが其一つは確に「玩具が完全に出て居れば居る程自由がきかないと云ふ點にあると思ふ或程度迄は融通のきく玩具の方がかへつて自由な

豊富な子供の想像力を永く満足させ得ると思ふ、例へばこゝに完全に出て來た「玩具の鐵砲」を與へるかはりに木鋤を一本與へたとすれば、子供は「兵隊ごっこ」の時には肩にかついで「鐵砲だ」と云つて喜び又劍となし鎗となして突貫の眞似をして居るが其れに飽きれば今迄の鐵砲を忽ち時計の振子に變へて紐の所を指で支へて「先生！時計の下にあるものです」と云つて振つて居る、しかしまた忽ちにして砂場に駈け出して「水道屋さんだ、水道屋さんだ」と云ひながら穴を明ける眞似をする。子供の想像力は木片一つをも己の思ふ通りに主觀視するのである。其れ故未だ想像全盛の時代にある幼稚園時期の大部分は何時も完全に近い玩具を與へて置くと云ふよりも融通のきく且堅牢なものを供給し自由に彼等の想像力を満足させた方がよいと思ふ、精巧なもの程破損しやすい、堅實な永久的な思想を知らず／＼の間に子供に與へる事は訓育の上から云つても大切な事である、謂ゆ

る高價な玩具がかへつて、かの、詩人の様な想像の流れの中に生きる子供達を、いつの間に制限ある世界に閉ぢこめてしまふ恐れがある事を思へば子供に與へる玩具 廣い意味で遊具に對して我々は大に考へなければならぬと思ふ。

(21) これは九月二十一日の事であつた、講堂の前でしきりにバツタ追ひに夢中であつた子供達、やや疲れて皆保姆のまはりに集つて來て靜かに、未だ刈つてない草原の間を逍遙する、その中に寄宿舎の傍のテニスコートの所に立つてゐる白い立札をS兒が見付けた、S兒其前に立ちニコくしながら「先生！二宮金次郎が本をよむ所です」と、如何にも讀む様に腰をかためて居る、未だ文字をしらぬこの子供は此立札の傾斜の工合が嘗つて繪本か何かで見た「二宮金次郎讀書の圖」にでも似て居たのであろう。

(22) 同じ日に、やはりS兒草を頭にかぶりクロバ―を鼻の所につけて「天狗様だ々々々」とおどつ

て居る、やがて鼻のクロバ―丈けを取り頭の草を餘計にして「先生！僕武田信玄です」と、刻々にうがふ思想が一つ一つ自分のものとなり周圍をも征服して行くのである。

(23) 人形の腕が一本とれた、「人形は生きて居ないから痛くない」と云ふ子供は一人もなかつた、彼等の非現實性は人形も自分達と同じ様に痛かろうと同情するのであつた、先生が醫者になつた「一本腕がなかつたらどんなに困るだろう」とは彼等の心配であつた「これから可愛がつてやりませう」と一女兒が云ひ出す「ア、僕も大事にするよ」と男の兒までが云ふ、子供に取つては人形は何處迄も生きた友達である。

(24) 積木遊びの時にはよく子供の想像が奔流するのである。A兒が自動車を作つて「乗つて下さい」と云つて他の兒から紙人形を乗せてもらつて大満足「ポー、ポーポツポツ!!これから大阪に行きます。豆買ひに」と、大阪と云ふ事と「豆を買ふ」

と云ふ、事が何の苦もなく結びついて居る所が面白い、また丁兒「病院の寢臺だ」とて積木をつみあげて「サア！今ね、コレラになつた人を入れます」と、やがて「ア！もうなほりました」と云つて居る時は丁度コレラの大流行のあつた一九一六年十月三日であつた、實に積木遊びの時の子供の活動振りは大したもののである、今一日の有様の一小部分を記載して見れば、

「先生！こんな立派な自動車が出来ました」と、云ふ一方から「先生！先生！今病人がなほりましたから退院させます」と駈けつけて來る、すると、「先生！、もう京都のお使から歸つて來ましたよ」「先生！うちの自動車に乗つて下さい」また家や門を造り「お客」に來て呉れと云ふ、求めに應じて紙人形を持つて行く、大人が手が大きいので紙人形を握つた手は積木の門がくれない、仕方なしに側の方から坐敷に紙人形を入れると、「先生！いやです、天から人がはいつて來ては」と、云ひなが

ら急いで子供が自分で紙人形を受取つて門の内側に二つの紙人形を對向させて「今日は！」「よくいらつしやいました」などと初める、我々大人の心なき一動作が度々子供の美しき非現實の境涯をやる事があるのは誠にすまない事であると思ふ。

(25) 箸輪を出して一しきり遊んでもう片附け様と云ふ時にその中の輪を一人の子が耳にぶらさげて「奈良の大佛様だ」と云ふ、傍の一人が「いゝえ、朝鮮人です」と大騒ぎを初める、これも想像のあらはれであらう。

(26) 誕生會たんじゆうかいのあつた時に丁兒(六歳)お人形に玩具の膳たんのそなへてある所に立ち暫く眺めて居つたがやがて「先生！このお人形さんは何故お菓子を食べないんですか」と眞面目に聞いた、自分はこの美しい想像にふける子供に何と答へてよいか解らぬので「きつとお腹がいゝのでせうね」と云つた時此子供は「そうでせうね」と如何にも満足氣であつた、この兒とW兒砂場わにでしきりに團子を作つ

て居つたが「お蜜柑です」「柿です」と云ふしかし崩れてうまく出来ぬ、やつと形になつたのを持ち上げて「先生！あげませう」と云ふ途端にまた崩れた、曰く「ア、羨た、だから柔かいんです、柿も、お蜜柑も」と、柔かいと云ふ事と、羨立てと云ふ事とを結び付けてこの時には蜜柑、柿と云ふ事には頓着しない。

(27) 一月の末の少し暖かな日であつた、講堂の前で男女まざつていつもの様に小供等は風上げに餘念がなかつた、その時に女兒三人あはたゞしく自分の所へ走り來り、「先生ネ、今、發明をしたんですよ、早く見に來て下さい、いゝものを發明したんです、井戸を！」自分は何の事は分らず兎に角三人に引張られて行くと場所は講堂の後の日影の所であつた、其處に霜柱が立つて居つて足を入れとザク／＼下にもぐる、子供等は之が面白くて堪らなかつたのであつた、彼等は何と形容してよいか分らぬと見えて「井戸」と云つたのであつた、

この發見がどれ位彼等にとつて嬉しい事であつたらう恐らく我々の想像以上であらう。

(28) 〇兒、保姆と庭を歩いてゐる時にふと曰く「僕ね、世界中をお腹に入れて、先生も皆お腹に入れて」と、「そしてどうなさるの？」とさくと「おうちに持つて歸るの」と平氣のもの、哲學者の世界觀を聞く様である、しかしこの兒の云ふ「世界」がどんな意味か分らない。

(29) 講堂前の廣場で風上げをして居つた時霜解けの道にはいつたM兒、下駄が土について今迄走つてゐたのが走れなくなつた時「アア僕、故障が出來ちやつた」と、一體に子供の使用語が本當の意味で用ひられて居る時と否らざる時とある、子供と遊んで居る間に感じさせられる事は餘り言葉の上からのみ知識が入り過ぎてゐる傾向があるといふ事である、言葉上の争が一般に今の社會の傾向であるとするならばその空氣に包まれて居る子供達にまたこの傾向のあるのも免れられない事である

殊に道徳上の事が言葉から這入り「悪い事をする  
と不快である」と云ふ氣分の方から這入つて行き  
にくい傾のある事は考慮すべき事と思ふ、僅か六  
七歳の兒が如何に大人らしい言葉使ひをするかと  
云ふ事によく驚かされる、彼等が言葉の眞意をど  
の位まで理解して居るか、分りにくい、従つてい  
かにも非現實的だと思はれる彼等の言葉でも其意  
味如何によつては其實例となり得ない、次に一つ  
二つ例を上れば、

(a) 砂遊びの時「今銀砂會社で銀を製造して居る  
所です。

(b) 或る日食事の話の時に一つの机で彼等の間に  
西洋人と異人との差異如何の争が初まつた、S兒  
が「異人の子供はお茶碗の帽子をかぶつて居る」  
と云ひ出すと隣の兒曰く「西洋人もね」他の一兒  
が「西洋人と異人とは同じだ」S「いや、違ふよ、  
どうしても違ふわよ、西洋人と異人とは」此處で騒  
がしくなる、勝氣のS兒顔を眞赤にして、「どうし

ても違ふわよ、西洋人と異人とは！住む所が違ふ  
わよ」(男の兒だけれど、力を入れてわの所をこと  
に強い言調で云ふ)一人の兒「どんなに住む所が  
違ふの？」S「異人の家には煙突があるさ」他の兒  
「西洋人の家には？」と反問する、S「西洋人のう  
ちにも煙突がある」二人の兒「其れなら同じでせ  
う？」S「同じでも住む處が違ふさ」と主張し終  
つた、聞いて居つて噴飯せずに居られない、S兒の  
肥えた丸い赤い頬、熱心で少しのほせた顔、實に可  
愛らしい、しかし一方にかゝる時期から既に「言  
葉の上の争」があると思へば我々は余程反省しな  
ければならぬと思ふ。

(c) 虚言を云ふ、云はぬの争の時に(甲(男))「うそ  
を云ふなら三百六十圓出すんだよ」之に對して(乙)  
女「え、出すわ」甲「出すなら出して見い！」(乙)  
(丙)女「うそぢやないわ」乙「一錢あげるわ」甲「ど  
うら、出して見い！」(丙)學校へお金を持つて來ると  
叱れるわよ」こゝで一段落付く、この三百六十圓

は何を意味するか恐く言葉の上の事—よく子供がする言葉上の遊戯—に過ぎないのである。

(30) A 兒、突然自分を捉へて曰く「月は天に居る人ですね、僕ね、兎がね餅をベツタラコ〜と搗いてるのを見ましたよ」試みに「音が聞えて？」と云へば「いゝえ遠いから聞えませんよ」と現實に歸つたのであつた、あらゆる現象に生命を與へねば止まない此の時代に於ては月にある陰を伽嘶に聞いた様に思ひ込んで事實と見としまふのも無理はない。

(31) A 兒の家に赤坊が生れた、前から前日の様に「僕は兄さんになるのだ」と勇んで居たが愈々兄さんになつた時この兒の「新しい生命」に對する好奇心は非常なものであつた、朝來るなり赤兒の話をする、曰く「赤ちやんはね、金太郎さんの様に赤いの、そしてね肥つてますね、眼ばかり大きいですよ、よくオギア〜つてなきますよ」僕ね口の中に手を入れて見たらばね、まだ齒がない

ですよ、「頬べたを突つて見たらね大福餅の様に柔らかいんですよ」實に形容が面白い「子供の想像」といふ題下にはあはぬかもしれぬが大福とか金太郎とか云ふ言葉をよく子供の云ひたい心をあらはして居ると思ふ、かくの如くにもし自發的に經驗的にあらゆる智識を得る事が出來ればそれが理想であらう、而し今の社會狀態ではかゝる方法のみによつて行く事は出來ぬ、たゞ可成的に自發經驗の機會を與へまたそれが出來ぬとしても偶然の出來事に於いての子供等自身の發見を充分尊重する様にしたいと思ふ。

(32) 子供の著しい想像の力は彼等を駆つて遊びに熱中せしめるのである、子供の活動には目的に達する手段と云ふ事は殆んどない、活動そのものが彼等の生活である、我々大人には如何に無意味な様に見える活動も彼等には命がけの事である場合が少くない、恐らく兒童の強き非現實性は自ら生み出した想像の世界にいつも彼等を生かしめ其處

に眞剣に生活するのである、彼等の全生活のどの部分にも、かりの仕事とか、假の生活とか云ふものを見出されまい、殊に之を痛切に感じたのは或日A兒とS兒が木を手にして砂場に立ち、「瓦斯屋さんだ」「水道屋さんだ」と言ひながら丁度街路でする様に——勿論彼等はこれを見た經驗からするのであるが——手に唾をつけて、「エンヤサ、エンヤサ」と一生懸命にやつて居る、寒い冬の日であるのに頭から汗の湯氣をたて、凡そ三十分も續けて居た而し砂であるから如何に力一杯廻したとて鋤は同じ所をぐる／＼廻つて居つて穴を掘れると直ぐに周圍の砂が崩れ落ちるから一向に深くも大きくもならぬ而し結果の如何を問はず唯活動其者を生命として居る彼等が掛け聲勇ましく掘つて居るその熱中の有様は實に其の快樂の如何ばかりであるかを察するに充分である、自分はこの重大な仕事を一生懸命にして居る二人の子供に云ひしれぬ貴さを見出すと共に非現實性の著しさを思つた、又子

供と云ふ事からはなれてこの遊びから我々の努力について反省させられた、かの破不山に迷つた五人の青年の様に又この日の此砂場の穴掘りの様に我々の生活も一箇所をぐる／＼廻りして居つてしかも自身は實は眞剣に、額に汗して盡して居るつもりで居ると云ふ様な事が有りはしまいか、教育と云ふ大きな立場から考へても無益な努力と云ふ事が有りはしまいか？ 我々は屢々事物を客觀的の立場から見に行く必要があると思ふ、子供の遊び！ 我々はいつても彼等から多く受け多く教へられるのである。

(33) 少し教育の悪い七歳のO兒或る日食事の時にメリンスの袋入の木製の箸箱(もくせい)(袋から半分出る様に袋が縫つてある)を食事前に弄んで居つたが之を遂に人間にしてしまつて遊んで居る、其袋をぬがせたりかぶせたりして「君！今日は雨が降るから外套を着せてやろうね」と箸箱に話しかけてとれかけた袋をかぶせる、自由なる兒よ！

(34) 柿を觀察した日であつた、ハチャ柿を「大砲の彈丸の様です」と云ひ其柿を裁ち割つた時に心の所を見て「瀧の様です」と云ふ胚乳の所を「ヤア、餡の様だ!」と。

(35) 同日、非常に「晝夢」に耽りやしく柔しき氣分の少兒、柿の種々の大きさのあるのを見ながら「先生! 柿のお父さんとお母さんと赤ちやんとです」と。

(36) 子供の想像の奔流の思ひがけない事は何時も驚かされる事であるが次の例を著しいものと思ふ丁度「織紙遊び」をする時であつた前の時にしたのが九行で當日のは七行であつた其時の指導者が九行と七行とを並べて「上のは七段です、下のは九段です——行と云ふ所を段と云つた——」其最中に一兒曰く「九段! 九段! 靖國神社! 先生僕は先にお父さんと招魂社にお参りしたんですよ人が澤山で足をふまれそうだからお父さんに少し抱いてもらつたんです歸りに風船を買つてもらつ

て持つて居たら飛んでしまつたんです、そしたらまたお父さんが買つてくれたんです」と、七行、七段九段から招魂社からとんで風船迄、實に子供の思索は自由なもの——これは想像作用の例と云ふよりも聯想の方に入れる方が適當であらう——

(37) 強い想像の力が實際ないものを創作すると云ふ例には適當か否か疑問であるが次の様な事があつた、これは心理的に面白いと思ふ——寒ろ「豫期の觀念」と云ふ方にはいる事かもしれぬ——

或日遊戯で「時計遊び」をした。先づ輪の真中に出てゐる二人の子供が針になつて指しながらピアノで鳴らす音の數を數へて「何時!」とあてる遊びである其時ピアノを五つ打つた即ち「五時!」と云ふ事である然るに其打ち方が音と音との間の時間の隔りが一樣でなく四つ目五つ目の間が長かつた之を直線で表はして見ると 1 2 3 4  
——5 と云ふ様になつた、子供は「六時!」と答へた、輪になつて居る子供等も皆「六つ!」だと



云ふ、即ち四つ目から五つ目の間隔で一つ數へたのである、一體に數の觀念が基礎的に「量」から這入らずに器械的な、「言葉の系列」から子供の頭に、はいつて居ると云ふ事もこの一例でわかる。

(38) 動物園に遊んだ日の日記の中から特に想像力のあらはれたと思ふ部分を次にあげて見る。

(a) 鶴が餌をたべて居るのを見て「先生！鶴が口から水道を出してゐますよ」と。

(b) 白熊が水に這入つて居つたら「白熊の行水だ」と大喜で其の中に一兒が「先生！さぞ熊は寒いでせうね」と。

(c) 猿の所へ子供の突喚する時の騒のひどい事、「人間は猿に近い」と云ふ感じを禁じ得なかつた、やがて彼等は全く猿の友達になつた「お猿さん！お猿さん！そ——ら——、これあげますよ」子供は何時去らうともせず猿と遊んでゐる。

(d) 檻の所で身體を振る習性ある熊の前に來た時に「熊さん、熊さん！もうそんなにお辭儀をしな

くつてもいよ、いいのつてば——（好いと云ふののの意）——と、なか／＼振るのをやめぬ熊に氣をいらだてながら一兒は叫んでゐた。

暫時彼等は嬉々として動物達と遊び又物語つて居つたが突然一兒が「先生！先生！金太郎さんはまだ動物園に居るのですか？」と聞いた、金太郎の話の中に出て來る熊、兎、猿、かゝる動物を眼の當り見て金太郎を思つたのであろう、其後一しきり金太郎が桃太郎よりつよいとか弱いとか争が起つた誰か「金太郎は日本一に強いのだ」と宣言して事は濟んだ。

子供が熊や猿や其他の動物に本氣で話しかて居るのを見ると自分は、彼等の間に本當の對話が——我々大人の聞く事の出來ない——かはされて居るのではないかと思ふ、子供と動物！慥に其の間に越すに越されぬ大きな河がある、しかし時には其河が水ががれて今にも渡れそうになる事がありはすまいか、今日の猿と子供との態度や熊との

物語を聞くと今にも此河が渡れそうに思つた、自然にして置けば子供と動物とはお友達になり得る或は大人が少しもして見せる事がなければ子供は他動物に對して殘酷な態度には出ない否かへつて愛好の感じを持ち得るものではあるまいか。

(29)よく晴天の續きし日冬とは云へ暖かい日光を背にして遊園の縁臺に腰かけて遊んで居つた五六人「まゝごと」の道具をならべて居つたがS兒、玩具の茶のみ茶碗を五つ積みあげて「先生！お茶碗の十二階！」と云ふ次に他兒が其の茶碗をやゝ手荒く扱つた時に「アラお茶碗が可愛想だ」と、同情して居た、

(40)M兒とS兒保姆に兩手をひかれて遊園を歩いて居つた時M兒曰く「Mちゃんは天にのぼるからSちゃんは海におはいりよ」S「いやなこつた」M「いやなら其の邊そこの穴に這入つてしまへ」試みに「天つて何處？」ときくとM「天國の事さ」側からS「天國つてよい人が行く所なのね」と云ふ

(42)積木遊びの時にK兒が巧みに東宮御所を造つた隣の机の兒が動物の玩具を使用して居つたので其の中の兎をもらつて来て「東宮御所で兎を買ひます」と云ふ後にこの兒の所に來て見ると先の兎が轉つて居る、曰く「先生！兎がもう死んでしまつたんです、だから兎の銅像をたてゝやるのです、と

(42)同じ時で動物の玩具で積木遊びをして居つたS兒六個の動物を二つ宛重ねて上の三個と下の三個との頭が出會ふ様にした、曰く「先生！ねえ、今、上と上と下と下とがお話して居るのですよ」と如何にも面白相に云ふ、其の言葉のすぐ後に四本の足を指して曰く「チャア、に三つの門が出來た、此方の門を飛行機に乗りに行く門、この門は何々：」と動物の足を門にかへて説明を初めた。

(43)K<sub>1</sub>K<sub>2</sub>の二兒其の一人が「B君の家を知つてゐるか」と云ふ事から争ひが始つた、B答へて曰く、「僕知つてるさ、B君の家は「竹ズツポー」の格子

のある家だ」と、其の形容の可笑さに子供同士ドツト笑つた。

(44) 節分の豆まきの話をして居る時にK兒「先生鬼は洋服を着てきますね」と、突然にしかも奇抜な問に自分は答へに窮した。

(45) 砂場で六歳の男兒二人砂を鋤でたゝいて居つたが曰く「おさかなが出るよ〜〜」とやがて有る丈の大聲をあげて嬉し氣に「ソーラ出た々々」と、何が出たかと思れば砂場用の杓子である、生命なき木の杓子さへ彼等の力では生ある魚と化する事が出る「出るよ〜」と云ふ時から杓子が砂上に顔を出す迄の間の子供達の楽しさはどんなであらう。

(46) 箸輪遊びをして居る時B兒軍艦を造り、波の所に魚を六匹ばかりこしらへたそして競争させると云つて居る、其の中の一尾が尾をつけて居らぬので「この尾は？」と聞いたならば氣がついて「あちぎれてしまつたんですからこのお魚さかな(他の魚

を指して)につけてもらひます」と云ひながら尾をつける、又曰く「船頭さんに付けてもらひませう」と、また考へなほして「あゝ其れよりも軍艦の水兵さんに」と云ふ其の尾の切れた魚は二番目にならんで居つたので向側に居つたK兒「あゝそのお魚は尾が切れたから遅れたんですね」と

(47) 食後S兒「先生、お角力です」と云ひ手にごんぐりを四つ持つて來た何の事かと思へば室の一隅の木の實の箱の中から一番大きな肥えたのを見つけたので「お角力」と云つたのであつた、机の上のせて一心にこれを立て、「ハッケヨイヤ！」と云ふ直ぐにまた「駄目だ〜このお角力はちぎりに轉んでしまふ、と。

以上は想像全盛の時期とも云はれる幼稚園の時期において子供の生活から受け取つた印象の中から極めて生活の一端に過ぎぬ實例を列記したのであるが更に彼等兒童の生活に於て屢々起る「畫夢」の状態について一二の實例を記述して見たいと思

ふ、

狭い経験から大膽に推測する事を許されたならば先づ子供の年令が少ない程「晝夢」は實に詩の様な美しい而し簡單なものが多く年令が長ずる程——勿論幼兒期に於ける年長年少——其晝夢は複雑になり且亦、道德上の虚言うそと區別するのに困難を感じる様になる、即ち幼稚園の生活について云へば——三年保育とすれば——四歳五歳位の子供が「先生！私の手の中に蝶々がはいつてゐますよ」と手をすばめて云ふ「まあそう！どんな蝶々？」と云へば手をひらひて「ホーラ！とんだせう！それここに、そこに！」と形なき空間を追ふて行く、かかる場合には此の子供を事實花のまはりの蝶を追ひまはして居つたのでまだこの兒の眼には蝶がちらつてのこつてゐる手の中にあると思ふのもそれである丁度詩人が「皆無」の中からいろ／＼のものを生み出す様なものである晝夢としては實に單純な詩的なものである、けれども六歳、七歳と

なると晝夢も餘程複雑になり社會環境から多く刺激を受くるために虚言と云ふ事との區別に余程の考へを要すると思ふ。たゞ兒童一人一人の平常をよく觀察し個性も觀察し得る様になれば先づ其區別判斷に大した誤はなからうと思ふ。而し偶然我々が子供の言行に接した時に「うそを云ふ」と先づ頭に閃く様な態度になる事は慎まねばならない、虚言と云ふ様な言語が子供の耳に入つて居るさへ忌はしい感がある、我々は餘りに「うそ」と云ふ語を輕卒に用ひすぎはすまいか、何かあると直ぐに「うそでせう」と否定する傾向がある、子供のまへに「虚言」と云ふ語を決して用ひない又我々お互ひが「虚言」と云ふ眞の意を全く知つてこの言葉を口から出すのも忌はしい、恐しい罪惡をあらはす言葉であると思ふ様になりたいたい言語上の空論かもしれないぬが道德がまた一方に言語からいると云ふ事を思へばまた考へる必要があると思ふ、我々が幼兒の眞の同情者であり其人格の尊重者であ

る以上「うそでせう」と云ふ様な失禮な言葉はあ  
の被暗示性にとんだ幼児の前であやまつても發せ  
られない言葉ではなからうか、

「虚言」でせうと云ひたい時に「それは間違つたの  
でせう」と云ふ事を自分は成丈け務めて居る、間  
違ひと云ふ事は道德上でうそと云ふ様な故意の悪  
い意味を含んで居らず我々の生活には「失念する」  
と云ふ事も「間違ふ」と云ふ事も有り勝ちである。  
子供が道德上謂ゆる「虚言をつく」と云ふ様になる  
のは大人が彼等を信せずいつも猜疑の眼をもつて  
見るためではなからうか、直觀的な彼等兒童は、い  
かに年少でも自分の言行が大人に信せられて居る  
か否かと云ふ事は謂ゆる直觀するのである、一體  
に被教育者の人格を尊重し之を信ずると云ふ事は  
教育上の一大要件であるが幼児教育に於て特に大  
切であらう。

次に晝夢の實例をあげて見る。

(48) W兒はよく晝夢にふける兒である秋も末に近

い一日其前日から團栗拾ひに子供は夢中であつた  
が此日も朝來るや否や「朝の挨拶」の時まで拾つ  
て居つた、歸つて來て曰く「今向ふへ行つたらば鳥  
が居ましたよ、そしてカア／＼つて泣いて居まし  
たのそしてねMちゃん—同じ組の男兒にてW兒一  
所に團栗を拾ひに行つた—が石をぶつけてね羽  
根を折つとしまつたの」と、傍に聞いて居たM笑  
ひながら「うそばつかり」と、W兒はそれ以上云  
ひ張りもしないでそのまゝ嬉し相に團栗をガチャ  
／＼音させて居る、云はれたM兒も一向氣にして  
居ない、かゝる場合に子供は晝夢に耽りやすいも  
のであると云ふ事を考へないとW兒は作り事とし  
て人の悪口を云ふ憎むべき兒童であると云ふ事に  
なるけれども晝夢に酔ひやすい者であると云ふ考  
をも持つて判断すれば今の場合で「鳥が啼いた」と  
云ふ事とMちゃんが自分と一緒に居つて共に鳥の  
啼き聲を聞いたと云ふ事實が礎となつて嘗つて聞  
いた童話中の例へば「悪戯な男の兒が鳥又は雀に

石を投げた」と云ふ様な内容——童話の中で羽折雀の如き——が頭に浮んで來たとすれば事實と想像が結びついて此處にこの兒が眼のあたり其現象を見る如くに自分の先生に之を發表する様になるのである。

次に兒童が現實と空想とを混同すると云ふ事の例として「子供の夢」と云ふ事を研究するのも面白い事であろう、而しこの研究を餘程困難を伴ふと思ふ、實際子供の大人に夢を話す事もあるしかし子供の夢物語を聞きながら何時も起つて來る感まどひはその話の全部が果して夢そのものであるか否かと云ふ事である、子供の豊富な想像の力を殆無限に次から次へと新しきものを生み出すものであるから話しながらつけ加へて行く部分が餘程あらうつまり「子供の作話」と殆近いものになつてしまふ、それで夢そのものの研究即ち眞の、「子供の夢に關する材料を得る事は嚴密に考へば不可能と云はねばならない、此處にはたゞ夢に見た事を事實

と思ひ込んでしまつた一例をあげるに留める。

(49) W兒(七才)：この兒はよく夢をはなす知的方面の發達は普以下であり晝夢に耽りやすい傾向がある家庭は全く教育に考へのない中流以下の寧ろ粗野な方である此兒が一九一六年十月二十五日の朝幼稚園に來た、平常は實にブラリ／＼とあちこちを見廻して吞氣に來るのにこの朝は何故か珍しくサツサとやつて來た立つて居た保姆にいきなり飛びつく様にして「先生！お早うございます！」と云ふ如何にも安心した様に、其後も例になく自分の袖につきまといつてゐる「少し變だ」と感じた「何か家庭で冷たい事があつたのであろう」と自分がかう思ひながら欲するまゝにつかまらせて置いた、何しろ多くの子供その一人一人の無限の欲求になるべく充分に應じたいのでW兒の事ばかりも考へて居なかつた、この日晴天で暖かいので寄宿舎の裏に團栗を拾ひに出かけた、この時もW兒は私の手につかまつて放れない、その中に「先生！ね

私ゆうべこはい夢を見たのですよ」と云ひ出す。話して頂戴」と云へばこの兒は何時にない流暢に一息に次の様に話した。

「ゆうべ、ねえ、お二階の暗いお室でこはい夢を見ましたの、K先生とB先生―假りに我々保姆の名を略す、B先生とはM兒が二の組の時に受持たれし先生――とS先生―實習科生――と私とでお座敷で遊んでゐたらばその中にK先生―即ちこの時の話の聴者である――が見えなくなつてしまつたので皆で探しに行つたらK先生はね虎にたべられてしまつたの、B先生とS先生が探しにいらしてもいらつしやらないので歸つて來てしまつたの、とう／＼駄目なので私ね泣いてしまつたんです、そしたらお母さんに起されたの、本當に怖かつたんですよ、それから今朝迄泣いたんです、今朝はもうK先生はいらつしやらないと思つて來たんですよ」としつかり私の手を握つてゐる、「先生を虎にくはれてし

まつたと思ひ込んで來た所可愛らしくもありいぢらしくもある、

終りに

以上多くの實例により如何に兒童の生活が想像に富めるものであるか其一端をうかひ知る事が出來様と思ふ。以下思ひ付いたまゝに感想をのべて見やう。

考へて見れば偉大なる、藝術上の作品を其が繪畫であれ、文學であれ、殆ど其は人間の想像の産物である。悠久無限の空間の中に僅かに大海の一滴にもあたらぬ一少部分を占め永遠より永遠に續く「時」の鎖の一鎖にも當らぬ僅々五十年六十年の生命を享けて居る我々がこの有限の現在に生きながら而も過去に生き未來に生き、時に星と語り、月と談じ得るのは實に想像の働によらずして何があるろうか？

翻つて幼兒の生活に於て殊に想像か全盛の時代に彼等のこの生活を如何に導くべきか？那邊迄彼

等の想像力を満足せしむべきか？此處に種々の説が起つて來やうと思ふ、彼等のゑがく畫に箸輪遊びに奇想天外より落つる如き思ひ付きをなし巧みに事物の特徴をとらへ、實に小藝術家たる讚嘆の聲を禁じ得なかつたのも一度や二度にとゞまらぬ我々の生活からもし想像と云ふ働きを取り除いてしまつたらどうであらう！さなきだに物質的に傾きつゝある現社會に於て眞に人々が心から欲求して居るものは果して武器であらうか？金の力であらうか？否、恐らくは生活につかれはてた人々の最も熱望せるものは「人の心のうるほひ」であらう、しかも其の「心のうるほひ」は何が與へて呉れであらうか？

「在るものを在るがまゝに見よ！」と哲學者は云ふかもしれない、而し在るものを其在るがまゝ以上に美しく見る事が出來て、初めて我々の生活に潤があるものとなるのであらう、「實生活！實生活！」と叫ぶ聲に虜にせられて、しかも未だ社會生

活に一步も踏みこまぬ幼兒に迄もこの聲をあげせかけて其渦中に巻きこまんとする勢である、子供の時代が大人の生活の準備の時期であると云ふ事は、之を無下に否定する事は出來ないとしても幼兒期は其れ自身に「子供らしく生きる」と云ふ事に於て存在の意義があると思ふ、我々が本氣で倦つきに熱中した時代—風あげに寒さも恐れなかつた時代—人形の腕をもぎつて心から悲しんだ其の心—あの純な氣分は望む時に再び我々に歸つて來るであらうか？童話に酔ふて茶碗が物を云つても椅子が歩き出しても敢へて不思議としなかつたあの時—また呼びもどす事が出來様か？生涯に一度—たつた一度しか遭遇せぬ幼年時代わけても其著しい想像力を何處迄もかばつてやりたい、貴んでやりたいと思ふ。

「實生活」と云ふ大人の行きつまつた考から子供の遊びの凡べてを之に結び付け様と云ふ努力も極端になると子供の想像の芽をもぎとつてしまふ事



になりはすまいか、例へば積本遊びにしても強い  
て子供自身が這入ことの出来る座敷やくゝること  
の出来る門を作らなくとも、子供は小さな紙人形  
が積木のくゝり門を通つただけでもその想像の力  
は本當の人、本當の門を其處に書き出すのに充分  
であらう。

殊に、どうしても奪ひたくないと思ふのは兒童  
が物語から受くる快意である、彼等かこの快感を  
奪ふ事は彼等の生存を奪ふ事になる。たゞ其内容  
を充分に選擇して子供の心に少しの暗影も留めぬ  
ものであるべきは言ふ迄もない。我々は用意した  
る心を以て子供等のまへには、いつも「お話の庫」  
として立ちたい、彼等の想像の力を積極的に導く  
上にまた思想の發達に貢獻する上は「おはなし」は  
實に大なる使命を持つて居ると思ふ。

彼等の想像的生活を那邊まで満足せしむべきか  
これは充分に考究すべき問題であらう。我々は、い  
つも子供の前には「遊び仲間」であると共に教育者

である指導者である以上繪畫や音樂を愛好する時  
の様な責任のない氣分で子供の前に立つ事は許さ  
れない。何處迄も第二の國民—時代の後繼者—を  
完全になすべき責任ある以上社會生活が要求する  
理想をまた我々の理想として子供に對しなければ  
ならない。故に子供の想像の奔流の赴くがまゝに  
まかせて、之を傍觀して居る事は出来ない、或る  
場合には彼等を極力現實に引もどさなければなら  
ない事も少くない、

子供を指導する理想としては彼等のつよい想像  
力をたへず積極的に用ひさせる様にしたい、しか  
し時には消極的に抑へなければならぬ場合もある  
ことに其家庭生活が社會の低級に位する時には模  
倣を基として之に自由な想像を加へる所の彼等の  
言動には實に禁じなければならぬ事が數々ある。

かゝる場合に如何にすべきか！一體、子供が何  
かの役割を定て自ら役者を以て任じて居る時に傍  
にあるものが之をほめそやすとか、おだてるとか

すると益々其氣分を助長して興味を感じるが、けなすと全く不機嫌になつて、やる氣がなくなつてしまふ、これは我々大人にもある事であるが子供には著しい。そこで自分の狭い經驗から云ふならば、若しも子供の想像が教育上思はしからぬ方面に走つた時には體育者自身が之を喜ばぬ態度をとると大抵はそれ以上其のわるい「晝夢」に耽らずに早く現實にかへるものである、消極的方法ではあるが止むを得ぬ事であると思ふ。

子供の自然現象に對しての想像には大抵助長させたいところ思へ禁じなければならぬ場合は先づないと思ふ、人事界の出來事を見聞する所から來る彼等の想像的産出の結果が遊びとしてあらはるる事には随分消極的に出なければならぬ場合が多い、例へば卑近な例として一人が泥棒になり他の兒が巡査になつて追ひかけつこをする遊びの如きである。けれども僅かにせまい經驗から直に人事界、自然界を區別して之に對して斷言する事は

出來ないと思ふ』(大正六年二月)

● フレーベル會例會

△日時 六月八日(第二土曜日)午後一時半より

△會場 東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て

△講演

内外に於ける幼兒保育事業の施設狀況に就て

内務省囑託 生 江 孝 之

右一般傍聽者の來會を歓迎す

大正七年六月

フレーベル會